

## 〔研究ノート〕

## 蕪村筆夜色楼台図

—漢詩の賛と絵について—

下に載せた絵は、蕪村画の中で私が最も好きな絵ですが、見てすぐにわかるように、水墨画としてはたいへん珍しい形式をとっています。本紙が非常に横長で、しかも画面右端に大きな字で「夜色楼台雪万家 謝寅書」と題が書かれていて、一見すると絵巻のように見えるのです。しかし絵の構図は一目で見渡すように構成されており、明かに一幅の絵として描かれたことがわかります。

雪の夜空を表わすために、水をたっぷりと含んだ墨でたらしこみのように濃淡をつけ、降る雪は、生地を白く残したり胡粉を吹き散らしたりして表わされています。その大きな雪片は、山の柔かな線と相俟って、厳しいというよりも何かやさしい感じがします。私はこの絵を見ると、いつも東山の雪景色を思わずにはいられません。山の形の一つひとつ、町並の正確な配置は無論違っているでしょうが、この絵が醸し出す雰囲気は正に蕪村が慣れ親しんだ京都の冬に違いありません。

そう思ってもう一度題に目をやりますと、その一字一字を大きく書いた行体の書体と言い、「夜色楼台雪万家」という七言の一節のような文句といい、絵の雰囲気とはがらりと調子が異なるのに気づきます。言うならば、題の高踏的なものに対して、絵はまことに日常的なのであります。文人画の正統派から見ると、このような点が蕪村画の欠点ということになるのですが、蕪村自身はこのことをはっきりと意識して行っていたと思

われます。

と言うのは、唐の詩人賈島の詩を、蕪村は次のようにして味わっていたのです。

三月正当三十日

〈ケフハ三月ツゴモリヂヤ〉

風光別我苦吟身

〈春ガ我ヲステテ行ゾ

ウラメシイコトヂヤ〉

勸君今夜不須睡

〈ソレデイヅレニモ申ス

コンヤハネサシヤルナ〉

未到曉鐘猶是春

〈明六ツヲゴントツカヌ中ハ

ヤツパリ春ヂヤゾ〉

(柳女宛四月二日附手紙より)

これによって蕪村が漢詩をどのように受け取っていたかが判ります。我我にとって難しそうに見える漢詩も、中国人にとっては身についた国語の語感で味わっているという、考えてみれば実にあたりまえのことに蕪村はあらためて注意を向けていたのです。漢詩は難しそうに見えるから立派なのではない、万人に共通の人性をよく捉えているから皆が愛好して来たのであり、それをよく捉えることは難しいであろうが、人性が難しい筈がない、と蕪村は考えていたようです。漢詩を普段われわれが使っている日本語に訳してみることで、難しそうに見えるならば立派でないという誤解を、蕪村は解こうとしたのでしょう。

これと同じように、中国伝来の文人画を、親しみやすい日本の文人画にすること、それが蕪村の目指すところだったと思われま

(早川聞多)

蕪村筆夜色楼台図 紙本墨画淡彩 28.0×129.5cm.



季刊 美のたより No.62

昭和58年 3月 5日

発行 大和文華館